

「納税は人助け」

大分大学教育学部附属中学校 3年 近藤 澄空

税金は何のためにあるのだろうか。私たちは何かを買うとき、物自体の値段に加え税金を同時に払う。私はこの「税金」をあまり良くは思っていなかった。

私には小学2年生の妹がいる。彼女は小さい頃に発達障害を持っていることが発覚した。身体に障害があるわけではなく、軽度の知的障害で、脳の発達が二、三歳分遅れている。学校では、支援学級で発達障害のある子と一緒に勉強をしている。毎日楽しそうに学校に行っている。

妹は学校が終わった後、障害のある子が行く放課後等デイサービスに行っている。友達もたくさんいて、そこにいる先生達も優しく、「今日どうだった？」と聞くと、「楽しかった！」と言っている。私はそのような施設にどれくらいお金がかかっているのか気になった。両親に聞いてみると、毎日四千元ほど払っているそうだ。しかし、本当は一日あたり一万円、毎月二十万円もかかっている。税金により、その負担が賄われているらしい。また、妹は月に二回リハビリに通っている。そこではOTといった、日常生活に必要な動作の訓練や、STといった、先生とコミュニケーションをとる訓練を行っている。それにもお金がかかっている。一回につき、リハビリテーションと精神科専門療法、合わせて約二万円だ。しかし、驚くことにそれも税金により家庭の負担は0円だ。

私はこのことを知って驚いた。税金は誰がどこで払っているのかわかりにくいですが、私の妹は自分が思っていたよりも多くの人に支えられている。もしこれが全額家庭の負担だったら、妹は放課後等デイサービスにもリハビリにも通えていなかったかもしれない。たくさんのおかげで、私たち家族の生活は成り立っているとわかった。

もし今、税金がなかったらどんな世界だっただろうか。私たちが当たり前のように毎日学校に通えていることも、十分な教育が受けられていることも、病気になる時医療機関で治療を受けられることも、すべて税金があるからだ。私たちが日常生活で「当たり前」だと感じることは、税金がなかったら違っていたと思う。税金は人々の生活を豊かにしている。

税金によって人と人が繋がり、顔も名前も知らない人同士がお互いに支え合うことができる。私は今まで消費税によって少し高くなった料金を払うのが嫌だった。でも、私たちが日常的に納めている税金が、誰かを支え、誰かの命を救っているかもしれない。そう思うと、嬉しくなって、納税することにマイナスな気持ちは何も生まれてこなくなった。

私の将来の夢は医師だ。自分の手で患者の命を救いたい。でもそれだけじゃなくて、納税することで、お金のやりとりでは見えない、その奥の誰かを支えていきたい。納税は人助けだ。